追悼　長谷川堯さん

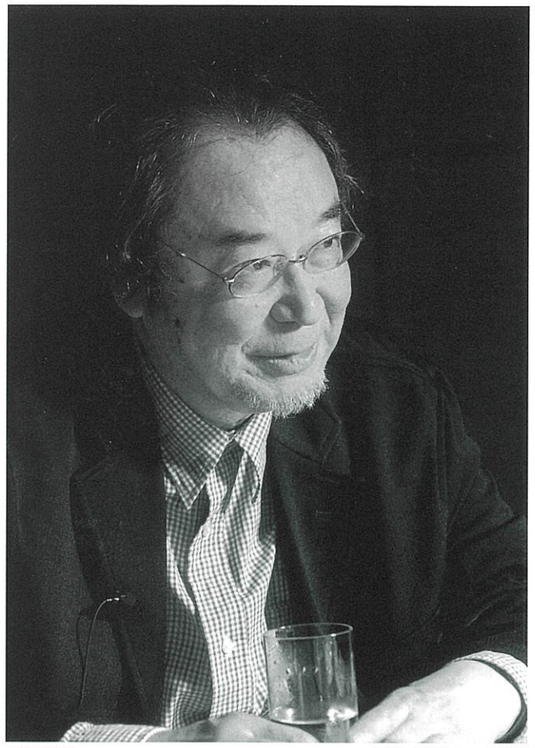
昨年2019年4月17日、建築評論家・長谷川堯さんが逝去されました。「建築評論家」という肩書きはこの人のためにあるのではないかと思えるほど、言葉で建築を表現しつづけた生涯だったと思います。それらの著作を長谷川さんとともに生み出してきた編集者の方々に追悼の言葉をいただきました。また、最初の著書『神殿か獄舎か』と最後の著書『村野藤吾の建築　昭和・戦前』の書籍解題、そしてこれらの著書が今なお読まれる所以を、建築史家の方々に分析いただきました。

（伏見唯／編集協力者）

長谷川堯・著書目録

『神殿か獄舎か』（単著）　1972年、相模書房／2007年、鹿島出版会（SD選書）
『建築――雌の視角』（単著）　1973年、相模書房
『都市廻廊　あるいは建築の中世主義』（単著）　1975年、相模書房／1985年、中公文庫
『建築の現在』（単著）　1975年、鹿島出版会（SD選書）
『日本近代建築史再考――虚構の崩壊』（共著、村松貞次郎・近江栄・山口廣ほか）　1975年、新建築社
『建築をめぐる回想と思索　対談集』（単著）　1976年、新建築社
『洋館意匠』（単著）　1976年、鳳山社
『建築有情』（単著）　1977年、中公新書
『洋館装飾』（単著）　1977年、鳳山社
『建築光幻学　透光不透視の世界』（共著、黒川哲郎）　1977年、鹿島出版会
『建築旅愁』（単著）　1979年、中公新書
『生きものの建築学』（単著）　1981年、平凡社／1992年、講談社学術文庫
『日本の建築　明治大正昭和　4　議事堂への系譜』（共著、村松貞次郎企画編集）　1981年、三省堂
『チュビズム宣言　Vol.1』（共著、谷川俊太郎・前田愛）　1982年、PARCO出版
『建築逍遥――W・モリスと彼の後継者たち』（単著）　1990年、平凡社
『建築巡礼――ロンドン縦断　ナッシュとソーンが造った街』（単著）　1993年、丸善
『日本ホテル館物語』（単著）　1994年、プレジデント社
『田園住宅　近代におけるカントリー・コテージの系譜』（単著）　1994年、学芸出版社
『建築の多感　長谷川堯建築家論考集』（単著）　2008年、鹿島出版会
『建築の出自　長谷川堯建築家論考集』（単著）　2008年、鹿島出版会
『村野藤吾の建築　昭和・戦前』（単著）　2011年、鹿島出版会

「建築有情――長谷川堯先生を偲ぶ会」配布冊子を参照


長谷川堯氏　写真＝相原功（2006年撮影）

長谷川堯（はせがわ・たかし）
1937年 島根県に生まれる。1960年 早稲田大学第一文学部卒業。卒業論文「近代建築の空間性」を『国際建築』に発表。1977年 武蔵野美術大学助教授に着任。1982年 同教授を経て、2008年 同大学名誉教授。1975年『都市廻廊』を中心として毎日出版文化賞、1979年 『建築有情』でサントリー学芸賞、1986年 「日本近代建築史再考に関する評論活動」で日本建築学会賞（業績）受賞。2019年 逝去。

建築評論の道へ

加藤正博

若き編集長、長谷川堯に出会う

僕は大学を卒業する少し前の11月ごろから、就職先の『近代建築』の発行元に出入りしていました。そこでは「出社しなくていいから、東京にある設計事務所を全部まわってこい」と言われ、半年ちかくかけて、東京中の事務所を訪ねて進行中のプロジェクトを聞いてまわったんです。それで、4月に正式に入社するときに、これから建てられていく建築をまとめたノートを見せたら、「来月からおまえが雑誌をやれ」と言われ、入社してすぐに責任編集を担うことになったんです。ちょうど、それまでいた人が辞めるタイミングだったからなのですが、無茶苦茶な話だと思いましたよ。

そんな経緯で、新しい建築を誌面に載せていたのですが、しばらくして最初になにか特集記事を入れたほうがよいなと思っていた頃に、堯さんに出会いました。高瀬忠重、相田武文、渡辺武信などの1930年代生まれの人たちと、堯さんは「Space 30」というグループをつくっていたのですが、そういった人たちと一緒に飲んでいる時に知り合ったんです。

新人作家の巻頭論文

建築というのは技術やデザインだけでなく、バックボーンとしての思想や時代性から生み出されるものです。僕は、卒業論文で、建築運動におけるヒューマニズムについて書いたくらい、そういったことに関心をもっていました。ただ、建築家が建築を語ると、どうしてもテクノロジーに片寄りがちになることが多いと思います。たとえば、家庭向けの医学書を、医者が書いたのでは、分かりやすい本にはならない。ノーベル物理学賞をとった朝永振一郎が、物理学の内容を一般読者に向けて「光子の裁判」（1949年、『量子力学的世界像』所収）という小説で表現したように、専門的な内容を分野を超えて伝えることが大事だと思っていました。初めてそれらしき人に出会えたので、あるとき堯さんに、美術評論ではなく、建築評論をしないかと聞いたら、「やる」という返事でした。

新人ですから、最初は時間をかけて。こちらも堯さんをどう売り出すかを考えました。やるなら一か八か賭けてみようと思い、巻頭論文にしました。右側に写真、左側に原稿という構成で、テキストを誌面の上から下まで流す1段組。それを24頁。3カ月にわたっての巻頭論文でした。それが、「日本の表現派――大正建築への一つの視点」（『近代建築』1968年9月～11月号、『神殿か獄舎か』所収）です。

対象をつかんで、たどり着いた言葉

長谷川堯は建築評論家になり、大学教授（武蔵野美術大学）にもなっていきますが、斬新な作品があったからこそのキャリアだと思います。その一つが「神殿か獄舎か」、名言ですよ。堯さんが大正の肝としてつかんだのが、大杉栄です。東京外国語学校を出て、『昆虫記』などを訳した翻訳家ですが、アナキストでもある。彼を通して、堯さんは建築を見ようとした。大杉はとんでもない人間だと思いますよ。妻と一緒に処刑されるくらいのことをしたのですから。ただ、そこまでの人間だからこそ、究極的なところまで思考が進み、人間のものの考え方と建築物とが、どこかで合致してくる。そして、堯さんに「神殿か獄舎か」という言葉を生ませたのだと思いますね。

神谷五男の作品集をつくるときに、その題をどうするか、という話になりました。ある市民会館をつくる時に木がたくさん植わっていて、神谷は「雑木林」だと言う。それを受けて、堯さんが付けたのが、「樹草への恋慕」（『近代建築』1979年10月号）。堯さんには、対象をつかんで、言葉を突き詰めていく、物書きとしての上手さがありました。

（談）かとう・まさひろ／ギャラリー珈琲店古瀬戸代表
聞き手・文責＝伏見唯

建築雑誌の黄金時代に

小川格

彗星のように現れた論客

1960年代、日本の近代建築は空前の繁栄を謳歌し、それに歩調を合わせて建築雑誌も次々に創刊し部数を伸ばしていた。長谷川堯が彗星のように現れたのはちょうどそんな時代だった。

長谷川が建築雑誌に初めて登場したのは『国際建築』。卒業論文「近代建築の空間性――ミース・v・d・ローエとル・コルビュジエ」が1960年8月～1961年2月号まで7回にわたって掲載された。その後小さな評論を執筆していたが、突然『近代建築』1968年9月～11月の3回にわたって「日本の表現派――大正建築への一つの視点」という大作を発表する。若い編集長・加藤正博の強いすすめに応じて書かれたものだが、雑誌の巻頭に大きな活字で1段組で、しかも思いっきり大きな挿絵とともに掲載された。これに注目した近代建築の研究者・村松貞次郎（当時、東京大学生産技術研究所助教授）が未知の長谷川に激励の手紙を書いたのは有名な話だ。

興味深いのは、その1年後、1970年の1月にその村松が日本建築学会の『建築雑誌』を大正建築の特集号として、長谷川に寄稿を求めたことである。村松の要請に応えて長谷川は「大正建築の史的素描――建築におけるメス思想の開花を中心に」を執筆する。村松は1969年、1970年と『建築雑誌』の編集委員長を務めていたため、大正建築の特集号を長谷川のために企画したものにちがいない。長谷川はその勢

連帯の宣伝へのカウンターパンチ

本橋仁

大正のはじめ。1914年のフランスでは、社会主義者の政治家ジャン・ジョレスが原理的な国家主義者の凶弾に倒れた。彼の棺は多くの坑夫たちの手で運ばれた。その翌年、1915（大正4）年の日本では豊多摩監獄が完成する。ここは後に思想犯として大杉栄、小林多喜二、三木清らが収監される。パリ、モンマルトルの裏側で、大正デモクラシーの華やかなカフェの裏側で起きたこれらの悲劇は、相容れない〈国家〉と〈自己〉の不都合な事実を示している。

獄舎のなかに、人間の「自己」を見出した

それから半世紀の70年代。第二次世界大戦の敗戦と、その後の目覚ましい高度経済成長によって再び日本は明るい時代に突入した。64年の東京オリンピック、70年の大阪万博、72年の札幌オリンピック。目覚ましい経済成長のなかで「日本」という共同体が再び認識されるようになる。田中角栄による国土改造は「建設」によって支えられ、長谷川堯の言葉を借りるなら「古典的体質（神殿をつくりたい！という欲望）」を、建築家は国家との共犯関係のなかで満たしつつあった。こうした「神殿」づくりの建築家の仕事を糾弾し、建築における「自己」を問うたのが長谷川の初期を代表する批評「神殿か獄舎か」であった。この論考の発明は、バラバラに論じられてきた都市と建築、さらに作家とを空間言語で架橋する難題を、思想家・大杉栄の「獄舎」空間体験を通して語ったこと。さらに大正時代の建築家、後藤慶二を通して70年代のカウンターとなる建築家像を提示したことにある。

獄舎と都市！　このセンセーショナルな対比により、長谷川は決して都市の品位を貶めようとしたのではなければ、戦後の建築家が事務所に「都市」を冠したことを侮辱したのでも当然ない。事態は逆だ。建築としての獄舎が、収監される囚人によって身体化される瞬間を発見し、獄舎のなかに「自己」を見つけたのである。さらに獄舎と都市との相似を指摘し、都市への希望を述べたのだ。獄舎に自己を見出した長谷川の高ぶりを、夜の静けさのなか思想犯同士が壁をつたう音を通して交流する様子を書いた次の一文に感じずにはいられない。

獄舎は夜、独房にとじこめられた囚人たちによって逆に占拠されている。建物は彼らの身体としてひろがり、闇の中でそれぞれ身体を結び、監獄を行刑者のものではなく、彼ら自身のものとして歌いあげてしまっている。その、こつ、こつ、という断絶的な音は重なりあって、石の教会堂の中を渦巻くパイプオルガンの音のように、獄舎の中を駆けめぐり、権力が分断した〈連帯〉そのものを回復させる。

思想犯が操る国家への凶器である「声」。国家が不都合なものとして奪った声は、国語としての「声」であり、赤ん坊の喃語（アウーの声）にも似た自己の存在を確認する「声」までは奪うことができなかったのだ。獄舎における声なき連帯により、身体化される空間を獄舎にみつけたのである。

そして、長谷川はこの獄舎の計画を行った「大正時代の建築家」に目を向ける。「神殿か獄舎か」は論考のタイトルであると同時に書籍名でもあり、歴史家としての重要な仕事は同書に所収される「日本の表現派」にある。彼は、未だ浮かばれない存在であった大正期の建築家たちの、伊東忠太以降の庇護者でもあったのだ。大正期の建築家の再評価は、モダニズムへの反省を基にしたポストモダニズムを牽引する木島安史、相田武文、渡辺武信ら同世代の建築家を大いに刺激する。彼らは以前から「Space 30」というサロン的な集いを催しており、長谷川は「神殿か獄舎か」の骨子をそこで初めて話している。彼の話す大正期の建築家の話に、最初耳を傾けた、彼ら若き建築家であった（椙山哲範氏によるインタビューより）。

ユーザー側に立つ建築批評の重要性

建築に「主体」という問題を設定するとすれば、建築家？　あるいは使い手？　であるか。神殿という建築家のイリュージョンと、獄舎という囚人の手の感覚を感じる、この文章の背後には、長谷川の師である美術史家・板垣鷹穂の影を見出せる。板垣も長谷川と同様、文学部の出身であり堀口捨己を始めとする建築家と交流をもつ一方、村山知義や堀野正雄らとも関係をもった。長谷川は後年、板垣に自らの像を重ね芸術表現として建築を批評することの重要性、さらに建築家の側でなく、ユーザー側に立つ建築批評の重要性について語っている。そうした視座は、サントリー学芸賞を受賞することになる『建築有情』（1977年）としても結実する。大杉栄を主役においたこの都市・建築論は長谷川の出自がゆえに成し得たと言ってよいだろう。

声小さき人に対して向けられた闘い

そして長谷川は「神殿か獄舎か」の締めくくりに、装飾あるいはディテールの復権を挙げる。これは後のライフワークともなる村野藤吾研究への補助線でもある。ディテールは、建築と人間との接点であり、建築の身体化において重要な課題でもあった。そこでアドルフ・ロースの「装飾と犯罪」は、分かりやすい装飾への仮想敵として引きずり出される。しかし、わたしはロースも擁護したい。冒頭ジョレスの葬儀の列には、ロースの姿があった。たまたま居合わせたと後述しているが真偽の程は定かではない。たしかなことは、その光景を美しいと綴ったことだけだ。ロースもまたウィーン市の住宅局で、低所得者層への住居設計に携わった。ロースをモダニズムの創始とするならば、モダニズムは社会改良という声小さき人に対して向けられた闘いであったのだから。

2020年、公共放送を除く民放各社が「一緒にやろう2020」と掲げて公共財の電波のメディアを占拠した。声高に「一緒に」と叫ぶ連帯の喧伝に、居心地の悪さを感じずにはいられない。この揺り返しは必ず来る。そのカウンターパンチとして、「神殿か獄舎か」は未だに有効である。

もとはし・じん／建築史家

「自己」の充実としての建築評論

笠原一人

長谷川堯の仕事のうち、『神殿か獄舎か』（1972年）や『建築――雌の視角』（1973年）、『都市廻廊』（1975年）、『建築の現在』（1975年）といった衝撃的な初期の評論と並んで忘れてはならないのが、1970年代から2010年代まで、長谷川が文字通り半生をかけて取り組んだ村野藤吾論であろう。村野は生前、日本の建築界にあって、必ずしも高く評価されていたわけではない。それは村野が自らを「少数派」と呼んだように、村野自身が自覚していたことである。しかしその村野を、日本の近代建築史の中で極めて重要な存在だと捉え直したのが長谷川だった。ここでは、長谷川の村野論に着目しながら、建築評論家としての後半生の仕事の意味を考えてみたい。

村野藤吾への語り口が、変化していく

長谷川が村野を本格的に論じたのは『都市廻廊』が最初であろう。そこではベルグソンらの概念を援用しながら、村野が、「過去」や「未来」ではなく、「現在」と「自己」を立脚点としてその充実を求める「プレゼンチスト」であり、ラスキンやモリスら「中世主義者」らにも通じる、「大正」的な建築家であることを論じている。その語りは長谷川ならではの粘り強い文体に支えられている。しかし建築作品についての記述は少なく言説を中心とし、「神殿／獄舎」や「明治・昭和／大正」、「雄／雌」といった概念や評価の図式がやや強く透けて見える。

それに対して、最晩年に書かれた2段組みで800頁を超える大作『村野藤吾の建築 昭和・戦前』（2011年）では、冒頭で村野を改めて「自己」の充実を求める「プレゼンチスト」と位置づけ、村野に対する評価が変わらぬものであることを示しているが、それに続く語り方は『都市廻廊』と異なる。村野の生まれや境遇から、大学を経て渡辺節の事務所に入る経緯が丁寧に語られ、その渡辺など村野の周辺にいる人物についてさえ、境遇や教育、建築に向き合う姿勢や思想などが詳細に語られる。そこから村野の立ち位置が明らかにされるのだ。そしてさらに、村野の戦前の主な建築作品そのものが、経緯を含めて、外観から内部、そして細部の装飾に至るまで、驚くほど克明に語られていく。

こうした描写については、長谷川自身が「あとがき」の中で、「瑣末なことに拘り過ぎた」「独りよがりな徒事」だったと反省の弁を述べている。読者にとっては、大きな深い森の中を歩いているように、なかなか村野の全体像が見えてこないことにもどかしさを感じるのは確かである。しかし読み進めていくうちに、それらの記述が決して無駄なものでも寄り道でもなく、すべてが村野の建築に向き合う姿勢や思想、作品に結実していることを理解することになる。

それは長谷川の徹底してモノやコトに則した具体的な語りによってもたらされている。その語りを通じて、読者は一つ一つの事象の意味が徐々に身体化されるような深い理解を獲得していくことになる。加えて、半生をかけて村野を論じた評論家としての長谷川の覚悟や凄味をも感じることになるのである。当然のことながら、読者以前に長谷川自身が、そのような感覚をもちながら書いていたはずだ。それはもはや長谷川の評論そのものが「自己」の充実を実践し「現在」を生きている、そんな境地にあると言えるのではないか。

中期の具体的な語り口が、晩年に結実

晩年にこうした変化がもたらされたのは、長谷川の中期の著作に拠ると思われる。『建築をめぐる回想と思索』（1976年）と村野の著書として知られている『建築をつくる者の心』（1981年）において、長谷川はインタビューアーとして具体的に村野に問いかけ、建築に向き合う姿勢や思想を明らかにしている。また8冊におよぶ村野の作品集『村野藤吾のデザイン・エッセンス』（2000～01年）においては、すべての巻に村野の建築作品についての評論を収めている。

中期に書かれた『洋館意匠』（1976年）や『洋館装飾』（1977年）、『建築有情』（1977年）、そして『建築旅愁』（1979年）も同様である。駅舎や地下鉄、廻廊、出窓、装飾といった都市や建築における部分的なモノが、人間の内面性の発露の結果として存在すること、あるいはそこに暮らし、活動する人々が建築に対して感情を移入する糸口となるものであることを、具体的に描写している。続く『建築逍遙』（1990年）や『建築巡礼22　ロンドン縦断』（1993年）、『田園住宅』（1994年）でも、具体的な語り口は似ている。こうした中期の著作は、従来長谷川の仕事としては等閑視されてきたと言えるが、これらの著作があったからこそ、最晩年の村野論が可能になったように思われる。

晩年に刊行された『建築の出自』に収められた書下ろしの前川國男論では、こうした変化を長谷川が別の形で自覚的に論じている。長谷川は、初期の著作においては前川を「神殿」の建築家あるいは「昭和建築の申し子」として論じていたのだが、ここでは前川に「獄舎」的で「大正」的な特徴を読み取っているのである。初期の評論にあっては長谷川が建築家の姿勢やあり方を問うたのに対して、晩年はむしろ評論する側の見方や論じ方次第で建築家の捉え方が変わること、すなわち問題は建築家や建築に向き合う長谷川自身の側にあることを自ら問うているようにも見える。ここでもまた、建築評論の実践そのものが「自己」の充実となり、長谷川自身がそれを生きているように思われる。

最後の著作『村野藤吾の建築 昭和・戦前』は、文字通り、長谷川の建築評論の実践の集大成として存在していると言える。

かさはら・かずと／建築史家

『神殿か獄舎か』
四六判・272頁
鹿島出版会
2007年12月
※初版は1972年に相模書房から刊行された。再構成し、SD選書247として再版されたもの

『村野藤吾の建築 昭和・戦前』
A5判・874頁
鹿島出版会
2011年3月

【文化としての住まいを考える】

住宅建築

6
2020 No.481
第481号／2020年6月1日発行
隔月刊年6回（偶数月）1日発行

田中敏溥の仕事

コミュニティを育む家づくり

【巻頭文】小さな町……ある日の夢 | 田中敏溥

村上の家 | 北国分の家 | 岡山の家 | 秋田の町屋 | 鎌倉山の家

【特別記事】バワ建築の源泉を探る旅 その1 | Barbara Annex

建築家と芸術家との協働が生まれる瞬間 | 木下光・和田彬代

【特別記事】第5回 吉阪隆正賞 受賞者／西沢立衛

【特別記事】追悼・長谷川堯さん

【シリーズ】登録有形文化財のこれから 第2回

奈良町宿 紀寺の家